

巻頭言 「グローバル・シティズンシップ・プログラム15年目を迎えて」	
グローバル・シティズンシップ・プログラム ディレクター 佐々木 諭……1	
[WLC] WLCの取り組み……2-3	
[GCP] GCPの取り組み……4	
[SPACe] 2024年度春学期についてのご報告……5	
[CETL] CETLの取り組み……6-7	
データサイエンス教育推進センター……8	
新任教職員紹介……8	

グローバル・シティズンシップ・プログラム 15年目を迎えて



グローバル・シティズンシップ・プログラム ディレクター 佐々木 諭

グローバル・シティズンシップ・プログラム（以下、GCP）は、創立50周年に向けたグランドデザインの柱の一つとして2010年4月に開設され、本年15年目を迎えました。GCPは、有為な世界市民を育成することを目指す学部横断型のオナーズ・プログラムであり、6学部（国際教養学部と看護学部を除く、経済学部、経営学部、法学部、文学部、教育学部、理工学部）の新入生のGCP希望者より、毎年約30名が選抜されています。これまでに選抜試験に合格したプログラム受講生は、1期生から15期生まで460名を越えています。

GCPIは1年次からの2年間の正課授業のプログラムであり、受講生はそれぞれの学部の授業を履修し、あわせてGCP科目32単位を修得します。GCP科目群は、週4回の英語科目、論理的思考力や課題解決力を育成するプログラムゼミ、データサイエンスのスキルを修得する社会システム・ソリューション、専門科目の基礎力を培うチュートリアルにより構成されており、いずれも高いレベルの授業内容とそれに応じた課題に取り組むことが求められます。あわせて、1年次の春季休暇には、全額給付型奨学金による約2週間の海外研修に参加します。海外研修は、プログラムゼミとも連動し、1年次に習得したアカデミックスキルを活用したフィールド調査と分析、英語プレゼンテーションが含まれています。

1年次と2年次にプログラムを実施している理由は、課題分析力や論理的思考力をはじめとする汎用的なアカデミックスキルと高度な実践的英語力を徹底して2年間で鍛えることにより、3年次以降に学部の専門的学修をさらに深め、海外長期留学や学外の国際会議、国際学会等に積極的に参加する基礎を築くことにあります。

GCP開設以来、学生に対する深い愛情と教育に対する熱意あふれる約20名の教員と職員、そして何よりGCP受講生の勉学への不断の努力と高い志のおかげで、本学のオナーズ・プログラムの名に相応しい実績を示していることは、何より嬉しい限りです。これまでにオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ジョンスホプキンス大学をはじめとする海外大学院への進学、国家公務員総合職の採用をはじめ外務省専門職試験、司法試験、公認会計士試験の合格、外資系・日系グローバル企

業への就職、国際機関への採用や地方公務員、教員、国内外の研究者として活躍するなど、実に多彩な進路を切り開いてきました。

本学における世界市民教育のさきがけとして開始されたGCPが、世界市民教育のロール・モデルへと発展した要因として、以下のラーニング・コミュニティの形成、学際的な学びと専門性、留学を含むアウェイ体験の3点があげられます。

第1に、GCPはオナーズ・プログラムでもあるため、優秀層の学生が選抜されており、高い目標に向かい、学生同士が励まし合い、競い合い、それを教職員がサポートする学習の場、ラーニング・コミュニティが形成されています。そこでは「共創力」が醸成され、互いに努力し合うことが相乗的に学修を深めることにつながっています。

第2に、GCPは学部横断型プログラムであるため、GCP受講生は、学際的な考察力と専門的な分析力を修得することができます。アクティブラーニングの授業をとおして、学部の枠を越えた多様な視点で考察し、あわせて、所属する学部のディシプリンに基づいたディスカッションをとおし、専門性の知識と技術を修得することの重要性の理解を深めています。学際的な多様な視点と専門的な分析力は、複雑化する世界において、世界市民として必須な能力と考えられます。

第3に、GCP受講生は長期留学や国際会議、国際交流などへのグローバルなアウェイ体験をとおし、世界で通用する素養を育てています。GCPの2年間で実践的英語力を徹して高め、8割以上の学生が長期留学に参加し、1年次より国際会議や国際交流に参加しています。長期留学では、学部や大学院のレベルの高い専門科目への挑戦や、英語以外の言語圏への留学により更なる外国語の習得を目指す受講生もいます。国際会議では、世界から集う学生らから知性の触発を受け、世界市民としてより高い目標に向け挑戦する機会となっています。

GCPは、世界市民教育のパイロットケースとして、本学の創造的世界市民の育成に波及効果を及ぼし、少なからず貢献を果たしてきました。今後も教職員が力を合わせ、世界市民教育の可能性を引き出していきます。

タイ・キングモンクット王工科大学トンブリ校 (KMUTT) 御一行来学報告

2024年6月、タイのKMUTTから、大学院生2名と教養学部のナジリー准教授が創価大学を訪問しました。大学院生の訪問は、本学大学院文学研究科国際言語教育専攻英語教育専修との交換留学協定に基づくものでした。また、ナジリー准教授は、KMUTT側の交換留学協定の責任者として、大学院生と共に来学されました。以下、来学中の活動や成果について報告します。

来学した大学院生は、KMUTT大学院応用言語学英語教育専攻に所属しています。彼らの2週間にわたる滞在中には、以下の活動が行われました。

- ワールドランゲージセンター (WLC) が提供する英語科目の授業参観
- 創価高校の英語授業の見学
- WLCの英語教員との懇談会
- 研究発表
- 東京観光

これらの経験は、今後彼らが優れた英語教員として活躍するための重要な基盤となったことでしょう。また、このプログラムでは、本学大学院文学研究科英語教育専修の院生も同様の経験をKMUTTで積みます。英語教育専修とWLCは、このプログラムが異文化理解と学識を深める貴重な機会となるよう、今後の一層の発展を願っています。

ナジリー准教授は、大学院生の活動を見守りながら、WLCとの教育交流の進展を図るため、本学首脳との会談やさまざまな会議に参加されました。まず、今年度から

開始される本学学部生対象のKMUTT語学研修に関する協定書が締結されました。協定書には、鈴木学長、小山内副学長・国際部長、関田副学長・学士課程教育機構長、尾崎WLC長が署名しました。この語学研修については、これまでに何度も協議が重ねられてきました。研修の目的は、現地学生と協力して国内外の課題を発見し、解決策を提案すること、地域活動への参加とその経験を自身の生活に活かすことを通し、世界市民としての資質を養うことです。

今後の両大学の交流としては、共同研究、教員交流、学術会議の開催などが考えられます。特に、KMUTTはソフトスキル（非認知能力）を測定するための質問票を開発しています。これには、創造性、コミュニケーション能力、自己肯定感、自信、そして地球市民意識などが含まれています。KMUTTでは、学生が卒業までにこれらの能力を身につけ、成長させる教育を行っており、その目的はWLCのミッションと一致しています。本学の学生がこれらの能力を身につけるための具体的な方法も、すでに実践されています。WLCは、KMUTTがこうした能力をどのように育成しているかを学ぶため、さらに協力を深める必要があります。WLCが目指す「言語能力の育成を通じて世界市民を輩出する」という目標は、すでにKMUTTが取り組み、成果を上げている内容でもあります。WLCはKMUTTの取り組みをモデルとし、真摯に学ぶことで今後の発展を期しています（ポール・ホーネス）。



プロフェッショナル・ディベロップメント (PD)

2024年7月に行われたWLC教員研修で、ユージーン・アッドー助教は、日本の大学生の英語力向上を目指した革新的な活動“Fix It”を紹介しました。この活動では、日本各地にある英語の誤りを含む広告や看板を題材に、学生がその誤りを見つけて修正し、正確で分かりやすい英語に書き直します。この練習は、日本語から英語への直訳に起因する問題を解決するだけでなく、両言語の構造的な違いを理解することも目的としています。

“Fix It”に取り組む中で、学生たちは広告や看板の誤りが、自分自身のライティングやスピーキングの誤りと似ていることに気づきます。その結果、自身の繰り返しちな誤りに気づき、それを修正する手助けとなります。実際の誤りを修正する経験を通じて、学生は自分の英語学習上の問題をより深く認識し、言語の使い方に対して批判的な視点を持つようになります。

このセッションでは、“Fix It”が教育的でありながら楽しい活動であり、学生の英語力向上に効果的なツールであることが強調されました。アッドー助教は、この活動に対する学生からの肯定的なフィードバックや、さまざまな教育環境に適応できる“Fix It”の柔軟性についても説明しました。学生の関心と言語意識を高めるために、この方法をより多くの授業で活用することが奨励されました (ジェイミ・パードン)。

WLC相互授業参観制度

WLCでは、高い教育水準と一貫性を維持するため、教員による相互授業参観を実施しています (現在は英語科目のみ)。この取り組みは、教員が自身の教育実践を振り返り、専門家として成長するための協力的で支援的な機会を提供します。相互授業参観は、決められた手順に従いながらも、柔軟に実施できるよう設計されています。その主な目的は、教育の質を継続的に向上させることです。参観を通じて教員は自らの実践を検証し、より良い教育を目指し

ます。相互授業参観は以下の3つの段階から成り立っています。

1. 事前段階：参観対象者は信頼できる同僚を参観者として選ぶか、参観者の選定をコーディネーターに依頼します。授業前に打ち合わせを行い、授業計画、目標、およびフィードバックを希望する領域について話し合います。
2. 参観段階：参観者は授業の流れや学習者の取り組みを詳細に記録しながら見守ります。この時、参観者は授業内の活動に参加しません。
3. 事後段階：参観者が記録を共有し、参観対象者が授業を振り返ります。この段階では、参観者の質問やコメントを通じて、より深い振り返りが行われます。

このアプローチは、自己肯定、支援、協力を重視し、教員の不安を最小限に抑え、振り返りを最大限に活用できるよう設計されています。参観者は参観対象者との良好な関係を築き、建設的で肯定的なフィードバックを提供することを目指します。事後のディスカッションでは、一方的な批判ではなく、教育活動の背景にある理論を探る質問を投げかけ、両者が協力して学び合う経験を促進します。WLCの相互授業参観は柔軟で、教員は参観者を選ぶことができ、参観は相互的または非相互的に行えます。事前および事後のやり取りは、メールまたは対面で行うことができます。

このシステムによって、WLCの教育実践には以下のようなプラスの影響もたらされています。

- 教育方法や理念を定期的に振り返る機会の提供
- 革新的なアイデアやベストプラクティスの共有
- 継続的な改善と同僚間の支援的文化の醸成
- プログラムや科目の質と一貫性の維持

相互授業参観を通じて、教員はスキルを磨き、効果的な教育戦略を取り入れています。この取り組みは、活気に満ちた進化する教育環境を育み、最終的には学生に質の高い言語教育を提供することに繋がります (ナサニエル・フィン)。

■WLC 教員の紹介 マルチェラ・モルガンティ准教授

マルチェラ・モルガンティ准教授は、イタリアのアドリア海沿いの町リミニで生まれ、サンマリノ共和国の国籍を持っています。高校卒業後、パリで現代舞踊団の振付師兼ダンサーとして活動しました。その後、東洋言語文化学院日本語学科学士課程 (フランス語、日本語の翻訳・通訳専攻) に入学し、1988年に卒業しました。来日後、イタリア語やフランス語の講師、フリーランスの翻訳・通訳者として経験を積んだ後、イタリアのシ

エナ外国人大学で外国人向けイタリア語教育法の修士号を取得しました。現在、創価大学でイタリア語とフランス語の授業を担当し、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) に基づいた教育を実践しています。また、日本の外務省での日伊通訳研修や、東京イタリア文化会館で講師も務めています。今後は、翻訳・通訳 (イタリア語、フランス語、日本語、英語) の専門家としての実務経験を大学での語学教育に活かしつつ、マルチリンガリズム教育、とくに言語習得過程の比較に関する研究を進める予定です。

GCPディレクター 教授 佐々木 諭

GCP15期生25名が選抜

2024年4月に、グローバル・シティズンシップ・プログラム（以下GCP）15期生25名が選抜され、大学生活をスタートしました。GCPは2年間の正課集中プログラムであり、高度な英語実践力、論理的思考力、課題解決力、データサイエンス力を育むことを目指しています。15期生25名は、全員が春学期のGCP科目の履修を終え、秋学期は更に高い目標に向け日々学びに挑戦しています。

GCPは本学のオナーズ・プログラムでもあり、受講生は入学時の選抜試験を合格した学生となります。所属する学部の特長科目や共通科目の履修授業と合わせ、おもに放課後にGCP授業を受けます。あわせて、GCP授業のレベルは高く設定され、課題量も多く、応じて授業外学修時間も長くなるため、GCP生の負担は大きくなります。そのなかでも、ほぼすべてのGCP生が2年間のGCP課程を修了していることは、学生の勉学に対する熱意はもちろんのこと、教職員のきめ細やかな指導とサポートも大きいものと考えられます。

さらに、GCP生が継続して学習に取り組み、2年間のプログラムをやり遂げることに大きく貢献しているのが、先輩らによるピアサポートがあります。GCP課程を終えた3年生以上のGCP生が、メンターとして定期的に1年生と2年生の学修や学生生活について懇談し、教員による指導のもとに、後輩のサポートを行っています。メンターは、5名程度のGCP生を担当し、学生に応じたもっとも相応しい取り組みを一緒に考えます。GCPのピアサポートは、後輩の学修の励みのみならず、先輩にとっても共に成長する学びの機会となっています。

第18回GCP総会を開催

5月3日に、第18回GCP総会が対面とオンラインのハイフレックスで開催されました。GCP総会は、在学生と卒業生がGCPでの学びの成果や卒業後のキャリアについて報告し、それぞれの目標に向けて挑戦の決意を深める機会として、年に2回開催しています。



総会には、田代康則理事長が出席され、対面とオンライン合わせ、120名を超えるGCP在学生と卒業生が参加し、1年生と4年生の在学生2名と卒業生3名が活動報告を行いました。

1年生の向井賢さん（理工学部）は、国立大学に合格をしながらも、「大きな夢や向上心を持ち、互いに切磋琢磨できる仲間がいるGCPなら、人間として大きく成長できる」と創価大学への進学を決めました。「受験勉強で培ってきた忍耐力、継続力、計画力を、GCPの勉学に活かし、将来の夢に向けて取り組みたい」と決意を述べました。

また、ノルウェー・オスロ大学に留学中の4年生の石井博子さん（法学部）は、オンラインで参加し活動報告を行いました。GCPで培った英語力、リサーチ力そして果敢に挑戦する力を活かし、ノルウェーの青年の政治参加に関するリサーチプロジェクトにも取り組み、リサーチの内容が高く評価され財団より助成金を獲得するなど、充実した学びの様子を語りました。

田代理事は、世界で活躍されているGCP卒業生の様子を紹介し、「GCP生ひとり一人がパイオニアとして、先駆者の困難を乗り越え、世界で競い合える実力を磨き抜いてほしい」と期待を込め、GCP生にエールを送られました。

総合型選抜グローバル人材育成入試が開始

2025年度入試より、総合型選抜グローバル人材育成入試（GCP型）があらたに導入されます。受験生の多様な入試ニーズに応え、かつ、グローバルな視点と人間力で課題解決の方途を示せる人材を育成するための入試として、本年10月に実施されます。

GCPはこれまで、入学前に選抜試験を行い、約30名のGCP生が選抜されていますが、2025年度入試からは、従来のGCP選抜に加えて、本入試の合格者にはGCPの受講もあわせて確定します。

創造的世界市民として、国際社会の課題に高い関心を持ち、解決に向けた知力と人間力を備え、社会課題の解決に献身しゆく志のある高校生の受験を期待しています。





2024年度春学期についてのご報告

2024年春学期のSPACeのサービスは、基本的に対面で（一部オンラインを併用）行いました。
以下、各部門の春学期の利用者統計を報告します。

ヘルプデスク

■表1 2024年春学期 HELP DESK 学習相談利用者（人）

	4月	5月	6月	7月	合計	%	前年比
予約	12	12	9	32	65	44.83%	1.81
飛び入り	35	21	16	8	80	55.17%	0.58
合計	47	33	25	40	145	100.00%	0.83

■表2 2024年春学期 HELP DESK 学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	参加者
1	4月19日	超超基礎編！ICTセミナー	35
2	5月17日	タイムマネジメントセミナー	26
3	6月19日	試験対策セミナー（経営・経済・国教）	9
4	6月26日	試験対策セミナー（法・教育・文・理工）	34
5	7月17日	夏休みQOL向上セミナー	5
			109

日本語ライティングセンター

■表3 2024年春学期 JWC 利用者（人）

	4月	5月	6月	7月	合計	%	前年比
チュータリング（実施数）	7	147	136	140	430	63.00%	1.76
レポート診断	0	78	18	157	253	37.00%	1.23
合計	7	225	154	297	683	100.00%	1.52

■表4 2024年春学期 JWC 学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	主催	参加者	
1	5月 7日	文献検索セミナー【導入編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	9	
2	5月15日	レポートお助け隊	JWC	18	
3	6月 4日	文献検索セミナー【実践編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	14	
4	6月11日	三角ロジック	JWC	8	
5	6月19日	レポートお助け隊	JWC	15	
6	7月29日	絵本ブッククラブ	図書館・JWC連携	12	
				合計	76

調べごと相談

■表5 SPACe調べごと相談（レファレンス）利用件数／2024年度春学期

	4月	5月	6月	7月	春学期	%
学術文章作法	0	5	8	15	28	68.29%
演習（卒論）	1	0	0	2	3	7.31%
その他	3	1	3	3	10	24.40%
合計	4	6	11	20	41	100.00%

※調べごと相談は、
①対面
②Zoom
③メール
を併用して行いました。

CETLは学士課程教育機構の教育支援組織として、FD・SD委員会や教務課と連携して、全教職員を対象にしたFD・SDセミナーや新任教員を中心とした新任教員研修、本学で行われている同僚会議やティーチング・ポートフォリオを推進するための勉強会など様々なFD・SDイベントを企画・運営しています。以下は、2024年度上半期の活動報告です。

学士課程教育機構主催のFD・SDの取り組み【春学期実施分】

■ 第1回 学士課程教育機構FD・SDセミナー

6月14日(金)(16:50~18:10)、本学学士課程教育機構 山崎めぐみ 准教授(障害学生支援室 室長)に講師をご担当いただき、「第1回学士課程教育機構FD・SDセミナー」を開催しました。

「障害学生への授業外の対応と支援」と題して、大学生活・履修・授業理解・キャリア等の相談を受ける際、学生本人が何をすることができるか、どのようなサポートが必要かを具体的に考える上で、学生生活全体から見た合理的配慮の位置づけや学生個人の気質、学生から必要な情報を聞き取るポイントについて、グループワーク

を交えながら、お話しいただきました。

当日は63名(本学教職員)の方にご参加いただき、終了後のアンケートでは、「職員としては、学生さんと授業外で関わることが大半ですので、『授業外』での関わりに焦点を当てた今回の研修内容は大変勉強になりました。障がいを持つ学生さんとの関わり方は、これまで同じ部署の職員のみで悩みを共有する場しかなかったので、普段は関われない他学部の教員の先生方とも意見交換することができたことはとても有意義でした。違う視点も得られましたので、今後の学生対応で活かしてまいりたいと思います。」等の声が寄せられました。

新任教員研修

■ 第1回新任教員スタートアップセミナー

4月20日(土)(10:00~12:00)、中央教育棟 AE256教室で、「第1回新任教員スタートアップセミナー」が開催され、2023年9月以降に採用された新任教員14名が参加しました。

当日は各グループに分かれ、冒頭、自己紹介など新任教員同士での交流を行いました。その後、西田哲史 教務部長による「本学における授業運営の諸課題」の講演では、学力のユニバーサル化による学生の傾向性やアカデミック・インテグリティを踏まえた対応、授業運営に関する留意事項などについて学びました。さらに、関田一彦副学長(学士課程教育機構長/CETLセンター長兼任)による「創価大学における教育・学習支援サービス」の講演では、本学のFD・SD活動や各種支援サービスの概要を通じて、学生を支援する正課外サービスの活用などについて学びを深めました。

参加者からは、「学生教育がきめ細かく丁寧に行われていることが驚きでした。教育支援にかかる様々な組織と連携させていただき、今後に生かしていきたいと思えます。」などの声が寄せられました。

■ 第2回新任教員スタートアップセミナー

7月20日(土)(10:00~11:45)、中央教育棟 AE256教室で、「第2回新任教員スタートアップセミナ

ー」が開催され、2023年9月以降に採用された新任教員13名が参加しました。

各グループでのセッションの後、新任教員を代表して、寺本羽衣 学士課程教育機構 准教授、辻塚秀幸 経営学部 経営学科 助教による授業実践報告がありました。それぞれ活発な意見交換および質疑応答が行なわれました。

参加者からは、「先生方の工夫、ご苦労が聞けて、安心しました。皆、持ち場は違っても悩みながら探りながらなんだなと思いました。自分だけが悩んでいるのではないことがわかり安心しました。」などの声が寄せられました。

■ 授業設計基礎Ⅰ / CETL勉強会

5月11日(土)(10:00~16:00)、中央教育棟 AE256教室で、関田一彦副学長による「授業設計基礎Ⅰ」を開催し、教員18名が参加しました。

授業の導入におけるコミュニケーションやアクティブラーニングが求められた背景、ペアリーディングやジグソー法といった授業手法、ガニエの9教授事象から見た良い授業のポイント、学生の学習意欲を想定した授業展開の重要性などについて学び合いました。講義の中では、グループディスカッションを通じて、参加者同士の意見交換も活発に行われました。

アンケートには、「自身の振り返りができ、課題も明確

になりました。他学部の先生方の経験も聞かせて頂き、これからの指導の要点が理解できました。講義内容は知りたかったことが詰まっていた大変深い学びになりました。」等の声が寄せられました。

■ 授業設計基礎Ⅱ / CETL 勉強会

7月20日(土)(13:00~18:00)、中央教育棟AE256教室で、関田一彦副学長による「授業設計基礎Ⅱ」を開催し、教員14名が参加しました。3ポリシーと教育の質保証、教育課程編成上の参照基準、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラムポリシーを踏まえた授業設計、自己調整学習のサイクル、アセスメント及び評価のためのツールなどについて学び合い、ディスカッションを通じた参加者同士の意見交換も活発に行われました。

アンケートには、「教員としての責任を再確認させていただき貴重な機会となりました。授業デザインの基礎から、シラバスの作成時のチェックポイントや授業設計の

工夫について、今回も大切な項目についていくつも教えていただき感謝の思いでいっぱいです。また、ご専門や経験の異なる先生方からもお話を伺うことができ、とても参考になりました。」等の声が寄せられました。



授業設計基礎Ⅰ

その他のCETL勉強会 / 研修会

■ 同僚会議ワークショップ / CETL 勉強会

5月25日(土)(10:00~17:30)、中央教育棟AE256教室で、望月雅光 経営学部 教授 / 学士課程教育機構 副機構長による「同僚会議ワークショップ」を開催し、教員13名が参加しました。

本学における同僚会議の意義・位置づけ、アクションラーニング(AL)の効能、質問会議(ALセッション)の手順、ALセッションのチーム規範やALコーチの役割などについて、グループ内でのディスカッションやセッションを通じて、学び合いました。

アンケートには、「組織、チーム、そして個々の3つのレベルにおいて同時に問題解決能力を構築していく方法に大変感銘を受けました。」等の声が寄せられました。

■ 簡易版ティーチング・ポートフォリオ メンター研修 / CETL 勉強会

7月26日(金)(15:00~17:00)、中央教育棟AE256教室で、関田一彦副学長による「簡易版ティーチング・ポートフォリオ メンター研修」を開催し、CETLセンター員である教員18名が参加しました。

本学が取り組む簡易版ティーチング・ポートフォリオ(以下、TP)は、一般的なTPで指定する5項目(責任・理念・方法・成果・目標)を網羅しながら、継続的なりフレクシオンを目的として、分量を制限した簡易的な形

で作成をしています。本学における簡易版TPは、FD活動の一環として、2021年度より全学的な導入を進め、各学部専任教員を中心に、3年に一度作成する取り組みを推進しています。本研修を通じて、本学のメンターに期待することやTP作成の留意点などについて学び合い、参加者同士で実際にメンタリングを実施いたしました。

参加者からは、「TPの意義、活用方法をあらためて確認できました。学部と同僚にTP作成を勧めやすくなりました。」との声が寄せられ、多くの気付きを得られる有意義な研修となりました。



簡易版ティーチング・ポートフォリオ メンター研修

本学の改組とデータサイエンス教育の今後

■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

■ 本学では、経済学部と経営学部の学びを融合し、発展的に再編する計画として、2026年4月に「経済経営学部 ビジネス学科（仮称）」の開設を目指して準備が進んでいます。この機会に、これまで一時的に共通科目で開講していた産学連携科目「データサイエンス演習A」「データサイエンス演習B」を経済経営学部の専門科目として、それぞれ「ビジネスプロジェクト演習（仮称）」「ビジネスAI演習（仮称）」として開講することになりました。また連携科目として、理工学部の学生が専門科目として履修できるように検討中です。いずれも応用基礎レベルのデータサイエンスを学び終えた、3年次以上の学生が対象です。また共通科目として開講してきたときと同様に、他学部生が履修することも可能です。

■ 現行の科目はサブタイトルも含めると「データサイエンス演習A：日本IBM共催」「データサイエンス演習B：アクセンチュア株式会社後援」となっていて、それぞれの会社に勤務する本学の卒業生の多大の尽力のもとに開講されています。卒業後も「後輩を自分以上の人材に」と支援してくださっていることに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。履修者の大まかな内訳ですが、最近では経済学部生が7割で、理工学部生が3割です。若干名ですがその他の学部から履修している学生が毎年います。理工学部の学生にとっては、テクノロジー目線ではなく、ビジネスを視点から考えることが新鮮なようです。逆に文系学生にとっては、自分たちのアイデアを理工学部の学生がアプリを使って具体的に示してくれたりするので、授業では相乗効果の高い触発が生まれています。履修した学生の中から、外資系企業のデータサイエンティスト職だけでなく、その他の分野でも採用を勝ち取る学生が出てきています。これまでは時代の要請に速やかに応えるために、一時的に共通科目として高度な内容の授業を開講してきましたが、開設予定の新学部の専門科目として本来あるべき姿で開講されることとなります。

■ 本学のデータサイエンス教育は、文系の学生たちが①入門レベル、②応用基礎レベル、③データサイエンス副専攻として段階的に学べるようにカリキュラムが構成されています。また理系の学生たちは、上記に加えて④情報システム工学科のデータサイエンス関連の科目を学ぶことができます。上記の産学連携科目「データサイエンス演習A：日本IBM共催」「デ

ータサイエンス演習B：アクセンチュア株式会社後援」（また後継の「ビジネスプロジェクト演習（仮称）」「ビジネスAI演習（仮称）」）は③データサイエンス副専攻において、企業の現場での実践をベースにした演習科目という大事な役割を担っています。なお上記①②は、文部科学省が推進する数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（①リテラシーレベル・②応用基礎レベル）に認定されています。本学では文系であっても、理系であっても、段階的な学びを通して、高い専門性を身に着けることができるように制度設計されています。これは新学部設置後も変更はありません。

■ さて新学部の動きとは別に準備を進めてきたのが、通信教育部でのデータサイエンス科目の開講です。通学部と異なり、基礎学力も異なる幅広い年齢層の学生が在籍しています。そのような学生たちが、超スマート社会（AI×IoT社会）におけるデジタル技術の活用について学べるように、2024年度から「データサイエンス入門」「データサイエンス入門II」「AI基礎」がスタートしました。3年前から準備に当たってこられた服部先生をはじめ、ご担当の先生方のご尽力に厚く御礼申し上げます。

■ データサイエンス教育推進センターは2021年5月に開設されました。本センターのミッションは、学生たちが「世界市民として、各学部で学ぶ専門分野において、数理・データサイエンス・AIのスキルを活用した問題解決能力」を飛躍的に高めていけるように寄与していくことです。今後の取り組みとして第1に、リテラシーレベルと応用基礎レベルの教育について、PDCAサイクルを回しながら、授業改善に取り組んでいくことが挙げられます。第2に、時代のニーズに合わせた副専攻科目の拡充が挙げられます。少し将来の話ですが、例えば、文系学生向けの情報セキュリティに関する科目の設置などが考えられます。また量子コンピュータを利用できる「量子計算クラウドサービス」などがスタートしていることから、量子コンピュータの演習授業があってもいいかもしれません。これらは将来的な課題ですので、本学のリソースを踏まえたうえで慎重に検討を進めていきます。

■ 本センターは、今後も学内外と広く連携をとりながら、創価大学のデータサイエンス教育のさらなる充実化に向けて取り組んでいきます。

学士課程教育機構
新任教職員紹介

WLC助教

ルストレ アンジェラ
ミランガ リヤナゲ

学習支援課 職員 平井優香



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第28号
発行日 2024年10月3日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>